

小平桂一氏ロングインタビュー 第12回：学術・教育への期待



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

小平桂一氏インタビューの最終回です。小平氏は総合研究大学院大学の学長を務めた後、日本学術振興会ボンセンターの所長を務め日本とドイツの学術交流に尽くします。ボンで10年間勤務する中で、日本とドイツでは大学の役割や社会との関わりが異なることを小平氏は実感しました。また小平氏は文部科学省の科学技術・学術審議会など学術行政にも深く関わります。このような経験をされた小平氏に、大学や学術、教育のあり方をお話ししていただき、最後に読者へのメッセージをいただきます。

●日本学術振興会ボンセンター長

高橋：総研大（総合研究大学院大学）の学長が終わって、次は日本学術振興会のボンセンターの所長をするということですよ。

小平：総研大の学長が終わるときには、学長が終わったらこういうのやってくれとかいうような話はなかったんです。それでも僕はゆっくりできると思ってたんですが、4月1日になってお昼に学術振興会の理事長から電話がかかってくる、「すぐにボンに行ってくれませんか」と言うんです。

高橋：4月1日に突然ですか。

小平：ええ。まあ直感としては4月1日にそういう話があるってことは、いろんな人を当たったけれども断られてしょうがなかったんじゃないか（笑）、だってそのとき僕は71歳だったわけですから。だけどまあ女房はずうっと苦労して日本ですばるに付き合ってきたわけだし、まあちょっとドイツに赴任するっていうのも悪くない。最初2年でいいですよと、だけど場合によっては1年延長、それから理事長裁量でもう1年で、4年くら

いという話だったんでね、まあそれなら75くらいまでだから何とか、と思って。

高橋：学振は世界各地にセンターを持っていますよね？ その役割はどういうものなんですか？

小平：ええと、結局、国際関係維持のためのリエゾンオフィスなんですよ。エジプトやケニア、あるいはタイなんかもそうですけど、日本の研究者が現地へ行ってアフリカ研究とか東南アジア研究とか考古学とかね、そういうことをやるときの研究連絡センターだったわけ。だからドイツでもまあドイツ研究とかヨーロッパ研究をする、それからヨーロッパの人と共同研究をやるっていうようなときの便宜を図るオフィスなんです。

高橋：コーディネートしてくれるってことですか？

小平：コーディネートもするし、それから一番大きいのは、ドイツ側の似たような機関があるわけですね。大学院レベルの人の交流はドイツ学術交流会っていう僕が昔奨学金もらったところ。それから研究者同士の協力は科研費を扱ってる研究振興協会とかフンボルト財団っていうのがやってるんですね。で、学術交流会とフンボルト財団って

というのは、外国から人を呼ぶこともやってて、そのお金はドイツの外務省から出るんです。外務省の中に学術外交って柱があって、そこがそういうお金を出すわけですね。

ドイツにいる間にだんだんわかったんだけど、ドイツって第1次世界大戦、第2次世界大戦っていろいろ悪いことしてナチスの時代もあるんで、世界中にドイツを理解してくれる知識人のネットワークを作るっていうのが国家安全保障のうえで大きなテーマなわけですよ。それからアメリカへ流出したユダヤ系の知識人を呼び戻すとかね。そういうのがあって外務省も絡んで国家安全保障政策の一環として学術交流っていうのを非常に大事にしてるわけです。経済や政治が冷えても、学術のネットワークはある程度動くわけですね。そういうところが相手なわけ。

高橋: 学術を通した外交というものに力が入れられているわけですね。

小平: はい。日本では学振がそのへん3つとも引き受けてて、しかも文科省っていう親玉1つでやってるわけで、そのニュアンスはずいぶん違うわけですけど、二国間協定でもってドイツから人を受け入れて日本からも派遣しますと。学振がやってる国際事業はいろいろあるわけですが、そういうのはほとんど学振の運営費交付金の中でやってるんですね。学振の運営費交付金っていうのは、大学と同じように減ってきてるんですよ。運営費交付金が減るのにつれて、ボンセンターの予算も減るわけですけど、それでもってセンターの人員費、それからドイツとの交流でやるシンポジウムの予算だとか、日本から呼ぶ講師の旅費もだんだんじりじり減ってきてね。初めみんなビジネスクラスで呼べたのが、もう今はエコノミーで呼ぶんですよ。そうするとね、医学部の先生とか薬学部の先生は自分のポケットマネーを継ぎ足してビジネスで来るんですけど、ほかの先生は本当に申し訳ない。エコノミーで来て、時差がある中を3日4日シンポジウムに出てそれでまた帰られ



写真1 ボンセンター前で石原あえか先生（ゲート研究者・中央）を囲んで。左に大川副センター長、徳野協力員、右に小平センター長夫妻（2013年9月、小平氏提供）。

るでしょ。だからその旅費がまず非常に厳しくなった。

それからドイツ側は学術外交っていうスタンスがありますから、外国との会議に伴って文化的催しもするわけですよ、音楽演奏だとかね。だけど日本はそういうのをやるのにあんまり経費が出ないわけです。音楽演奏やるのだって1人につき2万円とか決まってるんですね、しょうがないから僕のポケットマネーから奨学金と称してその倍くらいを継ぎ足すことにしてね。地元の若手音楽家で賞を取ったような人をお願いして演奏してもらって。

高橋: ポケットマネーでですか。呼ぶ音楽家はドイツ人ですか？

小平: ドイツ人です。だいたい10代の若い人たちですよ。そういう人たちをプロモートすることによってまあ自分の懐は痛むけれど、まあ僕っていうより家内の懐なんだけど（笑）、まあ自分を納得させられるっていうか。

高橋: ドイツとの交流のときにそういうイベントをするわけですか？

小平: 例えば年に1回は、ドイツ側の対応機関の関係者を呼んで夕食会みたいなのをやるわけですよ。「学振の夕べ」と称して。そうすると100人



写真2 ファンボルトフェロー懇親ガーデンパーティーに際して、Gauk大統領にご挨拶。左後ろにSchwarzファンボルト財団会長（ベルリン2012年7月，小平氏提供）。

近くいろんな人が集まるわけ。ドイツ側とか、ボンにある韓国や台湾やフランスとか友好国の学術機関の人も呼んだり。それからマックスプランクの所長さんとか、ボン大学の学長さんとかね。そういうときにやっぱり音楽が付きものなんですよ。ドイツではね。それからある程度のにぎやかな宴会っていうか、食事をするんですけど、そのメニューに前菜があってメインがあってデザートがあって飲み物があるっていうと、まあ結構高いんです。それをぎりぎり交渉して学振が許す経費の中に納められるかどうかっていうのが毎年大変なんです。

それから夏にいつも6月だと思んですけど、ファンボルト財団の年次総会っていうのがあってですね、それはベルリンでやるんですけど、世界中から来てるファンボルト奨学生っていうか研究者を600人くらい招くんです。家族も連れてきていい。だから小さい赤ん坊もみんな来てね、トランポリンだとかお絵かきができるコーナーとか作って。それで2日目の午前中に大統領の公邸の庭園で園遊会をやるわけですよ。そこで大統領がその600人くらいいる研究者を前に、「皆さんは世界の宝です。ドイツに来てくださってありがとうございます」みたいな演説をなさるんですよ。それで大統領はお客さんの中に入っていろいろ話をなさる。僕が

ボンに10年いる間に4人くらい大統領が変わったかな、皆さんいい話をされて。

● JANET

小平：ボンのオフィスっていうのはドイツ学術センターっていう大きなキャンパスがあって、そこにその研究振興協会だとか学術交流会とかのオフィスもあって、合同の職員食堂があるんですね。うまくないメニューなんだけど、とにかくそこに食べに行かざるを得ない。行くと相手方の機関の連中も食べに来てたりして、ビジネスランチとかをしょっちゅうやるくらいの緊密さなんです。

そのうちにですね、日本の国立大学が法人化された後、なんか国際化国際化と言われて各大学が外国にオフィスを置いたり協定を結んだりするのが流行ったんです。それでボンセンターにはもう本当にいろんな大学から調査に来るんですよ。まず彼らは協定を結びたいんだけど、ドイツ側の学術機関を訪問して調べたいっていう大学がどんどん増えてきたんです。

高橋：やたら協定を結びたがりますよね。

小平：ところが日本からいろんな人が来たり、それから日本の場合課長さんが交代するとまた新しい課長さんが来たりするわけですよ。それでドイツ側が音を上げて、「この前そのことは日本側に教えたはずなのに」と言い出して。それでまずドイツから情報を取りたいければ、自分の方の情報を出さないと取引が成り立ちませんっていうことにして、うちを通して調査に来る人は自分の大学について10分はプレゼンをする。そういうふうにしたんですが、それでも数がどんどん増えてきたんで、筑波大学長の永田（恭介）先生と一緒に JANET (Japan Academic Network in Europe) っていうのを作ったんですよ。今20以上の機関が入ってますけれども、毎年大きなフォーラムを1回は必ずやる。そういうのを2015年に立ち上げたんです。

それから日本国内ではね、競争的科研費なんかを取ったり、それから大学間を競争させて厳しい環境に置いて切磋琢磨させようっていうのが文科省の言い分なんでしょうけど、日本の場合あんまりそういうの向いてないんですよ。欧米とか元々が多様性の中で切磋琢磨してきた民族にはいいでしょうけど、日本人って和を以て尊しできていますから。だから日本ではもう各大学ともいかにしてほかの大学と違うことをやってお金を余分にとるかみたいなね。それとか学長さんが交替すると学長ディシプリンとかいって新しいビジョンを掲げたりしてやってる。

高橋: そうすると前の学長の施策が中止されたりして。

小平: ただ皆さん国境を越えてドイツまで来ちゃうと、相手の方がでかいもんだから、そういう競争意識があんまりなくなるんです。だからヨーロッパでそういうネットワークを作れないかと思ったんですね。まあ立ち上がって動き出してはいるけれど、それが逆に日本に影響を与えるようなレベルに行くかどうかちょっとまだわからないですけどね。それにこんなに国際化国際化っていう声が続くのかなっていう気持ちもあったんで、10年近く経ったら見直すのがいいだろうと思ってたんです。

●日本とドイツの大学

小平: それからドイツへ行って仕事してる間につくづく感じたんですけども、ドイツの大学っていうのは閉じてなくて、ほかとつながりを持っているわけですね。日本では大学で知的財産を生み出す、それを応用して社会に役立ってる、すると社会から研究費が大学に入ってくるっていうね、知が出て行ってお金が入ってくるっていう循環図がよく使われるんです。ドイツの場合はね、大学っていうのは人育てをやってるんで、そこで必要となる基本知っていうか原理的な知を生み出して継承していく。だけど、基本知に対して現場知ってい

うのかな、まあ社会知っていうかそういうものがある。社会知っていうのはフレキシブルで多様性がある、それが大学の中に入ってくるんです。インターンシップだったり、それから学生は平日は大学に出てても金曜土曜と企業に出たり社会的な仕事をしたりっていうのが普通で、普段から社会知が大学の基本知の中に流れ込むようなサイクルがあるんですよ。だから大学と社会に知の循環がある。大学に社会知が入ってくると、それを各科目に分けて専門知識として原理を追求して、それをまた社会に出していくというね、こういう知の循環があるからお金もそれに伴って流れていくっていう感じがあってですね。だから卒業生もドクター取ったからって研究室にばかりはいないわけですよ。例えばフンボルト財団だとか研究協会とか、日本の学振に相当するような組織の係長さんから上くらいはみんなドクターを持っているんですよ。もちろん企業の中でもある程度の仕事をしてる人たちは当然ドクターを持ってます。

だからドクターっていうのは専門性が高いというよりは新しいことに取り組んでブレイクスルーっていうか、山を越える力をつけた人間っていう運転免許みたいなものなので、そういう人間として社会のいろいろなところに出て仕事してる。大学の出身者はいろんなところで仕事してますからね、お金ももちろん入ってくるでしょうし、そういう人が教授になるってことも結構多いわけですよ。大学教授が企業の重役をやっているかね、そういう実社会と大学との関係がちょっとうらやましいなと思いましたね。

高橋: 日本でも産学連携ということが言われてますけど、まだそのレベルではないですね。日本とドイツでは大学に対する考え方が違うということでしょうか。

小平: ドイツへ行くと大学はじめ教育っていうのが日本に比べるともっと人づくりっていうのにフォーカスが当たってて、日本だと人間力だとか

言いますけど、学力よりは人間力というか人を育てるっていう。だから学力っていうのは人間力のうちの一部っていう感じですよ。

それで僕はドイツに行ってから日本に来るたんびに日比谷高校へ行って生徒と話すようなことをやってたんです。

高橋: 日比谷高校は小平先生のご出身ですよ。天文の講義をするということですか？

小平: 天文というよりはね、そのころはすばるを世間に説得するのに大変だったようなそういう話ですね。

高橋: そうなんですか。じゃあちょっと社会的な話ってことなんですか。

小平: そうですね。人間力をどうするかみたいな話なんです。例えば僕がやってた水泳っていうのは日本の古流泳法で、海で泳いでたわけですけど、PTAの人たちにも頼まれて高校で水泳を教えてたんです。まあだいたいみんな小中学校でプールでは泳げるようになってはいるんですが、ところが海に行くときまず向こう岸がないっていうのがプールと全然違う。行きつく先が見えない。それから深さがわからない。プールだと深さがわかるけど海だと深さがわからない。自分は浮いてるわけだから本当は深さは関係ないわけなんですけど。それから波があるとかね、潮流があるとかいろいろ不安で、だからプールでは何百メートルも泳げる人が、足がすくむっていうことがあるんです。それで向こう岸が見えないけれども着実に泳いでいくっていうことが、プロジェクトとか人生で問題にぶつかったときにどういうふう人間力を活かせるかに通じるっていう、そういう水泳の話をしたんです。それとかすばるがまだ難しかったころには、自分の利益だけを考えてたら絶対事は成らないんで、やっぱりみんなの力を合わせる。どうやったらみんなの力が1つになるかっていう、そういう話ですね、高校生に話すと。

高橋: なるほど、それが人間力になるわけですね。

小平: それから日本の国立大学や私立大学の人がドイツに大学の調査みたいなので来ますから、日本とドイツの教育の違い、特に最近の日本の教育とのギャップっていうのを感じてたんです。それでいろんな本を読んだりして、たとえば『江戸時代教育思想史研究』っていうこんな分厚い論文集みたいなのがあるんですけど、それは江戸の後期から明治にかけての日本の教育の在り方についての本なんです。民衆教育とエリート教育と両方の面の考察なんですけどね。民衆教育の方はまあ読み書きそろばんをみんな身につけさせる、それと公衆衛生みたいなことをやるんですけど、エリートの方は廃藩置県になる前に各藩が藩校ってのを置いてたでしょ。あそこで自分たちの藩の将来を担う人材を育てるっていうんで、独自の教育、学術をやらせたんです。初めのころは儒学で孔子だとか孟子の書を読むようなものだったけど、終わりのころはお互いにディスカッションするほど発展して、だから江戸の末期はいわゆる大学の本質に迫るような教育があったんです。

だけど結局それがだんだん官僚的になってきちゃって、明治政府になって帝国大学に移行していったわけですよ。そのときに日本の将来の指針を作るような人材というよりは、なんか有能な官吏養成みたいな方向に行っちゃって。帝国大学よりは私立大学を作った人たちの志はやっぱり日本の将来を担うような人間を育てるっていうイメージが強かったんでしょうね。

高橋: 官吏養成っていう当初の目的から今でもなかなか抜け出せないということなんですかね。

小平: 今の大学がなんかもう少しよくなるのか、経済的に苦しいんでしょうけどね。日本学術振興会の中に学術システム研究センターっていうのがありますよね、佐藤勝彦さんがセンター長(2019年当時)なんですけど。この前ある会議で、そこの副センター長やってる永原(裕子)さんっていう方と話したんです。やっぱり大学の運営費交付金が厳しいから、皆さん科研費の基盤Cとか

ね、金額が小さいけどあんまり大きな結果は出さなくていいっていうようなのを申請する。だから採択率が2割5分を切るようになってきているのかな。そうなるともう宝くじに当たるかっていうような感じになっちゃうんでね、今は基盤Sとか一番大きい方を取り崩して、基盤Cの採択率が3割に行くようにしようかっていう議論もあるんですよって。どうしたらいいでしょうねって。

高橋: 大きい科研費にあまり挑戦しなくなったということなんですね。

小平: 運営費交付金が増えないっていうのは、もちろん文科省とか財務省とかね、そういう官僚のこともあるんだけど、やっぱり社会全体として大学が自分たちの将来を担う市民を育ててるんだっていう意識がドイツに比べてずっと乏しいからだと思うんです。何か発見とか発明があるとお金が大学に入っていくけど、それは人育てというよりは先生の研究に期待してお金が産業界から入ってくるわけで、学問そのものあるいは大学というものに対する日本社会全体の信頼とか期待がちよっと筋違いになってるんじゃないかっていう気がしますね。議論してみるとね、そう思ってる人は結構いるんですよ。教育に関心のある人たちがね。教育というのはイナーシャ（慣性）がすごく大きい話ですから、どうやったらそういう人たちの力をまとめていけるかっていうのはすばるの比じゃないわけです。まあやっぱりひと世代くらいはかかる話ですよ。僕ができるのはその一部でしょうけど、なんかやっぱりやりたいとは思ってますけどね。

高橋: 大学は、単に研究を進めるとか優秀な官僚を輩出するだけじゃなくて、次世代の日本を担うような人材を育てるべきだよ。

小平: うん。それは特定の人を育てるのではなくて、やっぱりある環境をこしらえて集団として育てないと。その中からいい人も出れば下支えする人も出るし、それはいろんな人がいなくちゃいけないわけで。だから大学っていうのが全体として

社会の中でそういう役目を持つてる機関なんだという認識をみんなが共通に持たないと、お金だって回ってこないわけですよ。

高橋: 大学の教員も社会の側もそういう意識を持たないと。

小平: だから今の状態ですとね、大学の教員は研究費を取るのに時間も取られるし、それから人手がないですから雑用も多い。だからなかなか教員が教育にそこまで情熱をもってコミットできる環境にないわけですよ。それを変えていくっていうのはやっぱり政治家になるような人の感覚だと思うんですけど、そういう人が政治家で今いるかっていうとなかなかですよ。僕がすばるをやった頃にはまだ少しありましたけどね。

高橋: そうですか。

小平: まあ政治家だって国民が選ぶわけだから、社会の流れが反映されてるわけでしょうからね。

高橋: その人間力、総合的な力をつけるには例えばどういうふうにすればいいんでしょうか。最近アクティブラーニングみたいなことをよく言いますが、

小平: どうすればいいんでしょうねえ。ハーバード大学のリモートラーニングのよいプログラムもありますけれども、いくらビデオでハーバードの先生の講義が聴けてそれが知識にはなっても、やっぱりちょっとでもその先生と生活を一緒にするかね、面と向かっていろいろ話せる、あるいは一緒に飯が食えるというのは根源的な影響があるんじゃないかと思ってるんです。僕はそういうちょっと時代遅れ派ですから（笑）。

高橋: さっきおっしゃってた江戸時代の藩校なんかでは、もっとコミュニケーションを通した学び合いがあったんでしょうね。日比谷高校でのお話でも、プールと海の例えがあったじゃないですか。向こう岸が見えないし、深さもわからない。すばるを作る難局とか、そういうのを乗り切るにはやっぱりビデオで知識を仕入れるだけじゃだめだよ。

小平: うん、だめだと思うね。『宇宙の果てまで』

を読むとおわかりのように、僕は悩みに悩んで、こんなできるかできないかわからないことに関わったら泥沼でしょうし、岡村定矩さんとやった研究も横に置かなければならない、とかね。でもそれはわかりません。人生なんて勉強だから、僕は80いくつになっても何が本当に一番いいのかっていうのはわかりませんね。やっぱり人間は時代の中で育ってるわけですから、今の若い人はまた今の時代の中で人間力っていうかね、なんかそういうものがあるんでしょうね。

●学術行政

高橋: 小平さんは日本全体の学術行政にも深く関わってきましたよね。いろいろな役職をされたと思うのですが、そのあたりのお話を聞いていただけますか？

小平: 僕が一番身を入れたというか、親身に感じたのは文科省の科学技術・学術審議会ですね。総研大学長になってからですけど、その審議会の学術分科会長を3年くらいやったわけです。そのころ文部省と科学技術庁とが一緒に文科省になって、大学っていうものが科学技術の道具に成り下がってっていうか、学術と科学技術が両方「術」がついてるからといって並べられるのはおかしいんじゃないかというのが僕の感覚だったんですよ。要するに科学技術っていうのは人間の生計を立てていくうえでの道具だけでもね、学術っていうのは学問をやる道ですからもっと広くあるべきものなんです。それをねえ、科学技術・学術審議会みたいに科学技術が上にきてるわけですよ。そんなものは本当は経済産業省か何かがやるべきことで、今までの学術審議会っていうのが科学技術・学術審議会になってしまった。その中に科学技術分科会と学術分科会があって、僕はその学術分科会の方の会長を任されたんですよ。

だから僕は元々腹が立ってて、学術って何だろうっていうワークショップみたいなものを文科省の中でやらせてもらったんです。だけど文科省の

役人の連中は、あんまりピンとこなかったらしいですね。学術とは何ぞやっていう問い自身に。それで学術審議会というのは文部省のころからあって、いったんつぶれかけてたんですけども、Science Council of Japanと称してたわけですよ。一方、僕が10年勤めた日本学術振興会っていうのも学術なんです。Japan Society for the Promotion of Scienceで、「学術」を「サイエンス」と訳してるんですよ。あるいはサイエンスというものを学術と呼んで。それで科学技術というのは何かっていうと、science technology っていうわけですよ。サイエンスに基づくテクノロジーのことだろうと思うんですけどね、なんか知を基にした技術ということで、science technology っていうんでるんだろうと思ってたけど、science technology って言葉自体が和製英語的なんですよ。それで学術分科会長をやってくれっていうから引き受けて、最初は学術とは何ぞやっていうのをずいぶんやったんだけど、文科省はそんなこと期待してなくて、科研費の費目をどうするか、どれを増やしてどれを減らすとか、それからどのビッグプロジェクトをやるかってね。例えばスーパーカミオカンデをどうするかとか、宇宙線研のKAGRAだとか、そういうのはそこで議論しましたね。僕ときは確か、スーパーカミオカンデで1度ショックウェーブでもって光電管が割れちゃったでしょ。あれにすぐ予算をつけて復旧するための議論とか、それからJ-PARC (Japan Proton Accelerator Research Complex, 大強度陽子加速器施設) が初めちょっとうまくいかない時期があってですね、前提として安全性が保障できない。小さい方のリングで結構放射能漏れが大きいということがわかってやり直したんですけど、そのときの議論とかですね。

僕に関心としてはビッグプロジェクト、まあ自分ですばるやった経験からするとそれはそれでいいと、建つものは建つ。でも変に大きいプロジェクトやるとほかがみんな困るんですよ、小さい

中小のプロジェクトが、ビッグサイエンスプロジェクトのグループっていうのはそれはそれで政治に絡んだりいろんなことやって動いていくんだけど、本当に日本の学術で大切なのは裾野の広がりだとか大学の運営費交付金の問題だとか、そういうものは議題に出てこない。審議会だから官僚がお膳立てするテーマについて審議するわけですよ。自分たちでこういうことを新しく審議しよう、大学の運営費交付金について審議しようとかっていうふうにはできないんですよ。雑談ではできますけどね。よくガス抜きに自由に先生方のご意見をとかいう時間を5分くらいいただいたことがあるけれどもね、会長になると余計そんなガス抜きのリードなんかできないわけですけど、だから別にワーキンググループを作って学術とは何ぞやって議論したんです。柔道は柔術をやるとか、剣道は剣術をやるとか、じゃあ学術の道っていうのは何か、それは学問。では学問って一体何か。学問をやる人は学者っていうけど、研究者とどこが違うかってね。その議論をずいぶんやっただけだけど、官僚はついてこない。

高橋: 官僚たちは学術とか科学には興味があるんですかね？

小平: 科学者ではないですよ。ドイツだとそういうところの人がみんなドクターを持ってて研究歴があって、科学そのものにも興味がありますけど、文科省の主だったお役人ってみんな法学部出身とかね、そういう方々だからいかに物事をマネージするかっていう、そっちにたぶん関心があって。だから大学共同利用機関の一本化とかいうことになる、非常に熱意があたりだったんだと思うんですけど。

高橋: じゃあ科学の内容には別にそれほど…。

小平: だからまあすばるなんかのことでやっぱり世界で一線を行く装置であるということとか、それをやると宇宙の果てが見えるとか、そういうのはまあキャッチコピーとして使えるなあというふうには思うでしょうけど、スペクトル解析だど

かそんなのには特に興味があるとは思えないですよ。

高橋: 全然理系の人はいないんですか？

小平: 理系は少ないですね。文科省の中で理系は高等教育局の中の調査官とかっていうのにはいるけど、調査官って調査して答申する人で、政策を決められないですから。それと施設部っていうモノづくりの方は技術系の人がありますから、そこは工学部出が結構占めてますけどね。でも工学博士ってのはいないんじゃないでしょうかね。

高橋: そういう政策を作る場に、理系の人が多いた方がいいとかそういうのはありますか？

小平: うーん、それはねえ、日本の文化風土の中で考えると良し悪しで、文科省の中に特に学術面でそういう人がいると、自分の判断を通そうとする。今はそれがいいからその審議会だとかいろいろところで先生方の意見を尊重してやるっていう風土があるわけ。昔の明治のころっていうのは東大総長が文部大臣より偉かったような時代もあって、学者っていうものが政策決定に非常に大きな影響力を持ってたわけで、それはやっぱり社会的信用があったからなんですよ。ドイツだと今でも政策決定に学者の意見ってのはずいぶん効きますから。そういうときになんか俺は研究がわかるっていうような人が文科省にいて牛耳ると、ちょっと困るんじゃないかと思えますけどね。

高橋: なるほど、わからないからこそいろんな人の意見を聞いてくれるということですね。

小平: 僕が分科会長をやったのはもう2000年代に入ってからですからね。日本経済がちょっと下に落ちかけてたし、それをどうにかするにはイノベーションとかで科学技術からのアウトプットに期待するとか、そういう状況だったんで、なんか学問っていうのは科学技術の足を引っ張るようなそういう雰囲気もあったんですね。僕は一生懸命やったけれど、特にパツとした結果にはならなくて、そのうち2002年に行政法人が導入されて、2004年に国立大学の法人化ですね。だからその

前後は変な法人にならないようにっていうので駆けずり回りはしました。

前にも言いましたけど、大学共同利用機関法人って今4つあるわけですよ。国立天文台っていうのは自然科学研究機構の中に入っているわけです。あれも本当はドイツのマックスプランク協会のように、学術の共同利用機関を担当する大きな傘があって、その下にまあ4つくらいグループができたっていいけれども、と思って一生懸命やったけどやっぱり研究者っていうのは自分の分野の看板を下ろさないですよ。結局4つまでは行ったけどそれ以上は難しい。僕はそういうとりまとめ役で特別委員会の委員長をやったんで、皆さんに球を投げては様子をうかがってたんです。特別委員会が終わったあと総研大の学長をやってる間も1つにするようにずいぶん努力はしたんですけどね。総研大っていうのは全部を専攻に持っているわけですから。けどなかなかね、やっぱり分野の壁っていうか、まあ所長さん方は大きな傘の下に入りたくないっていう意識かなんかそんなものが非常に固くてね、ついにできませんでした。

高橋: もしそこで1つにまとまったら、やっぱり何か違ったんですかね？

小平: そしたらやっぱり日本の学術の共同利用をやる、つまり日本の学術の1つのプレゼンスとして予算のウェイトとか政界への働きかけとか社会への働きかけとかね。自然科学研究機構とか情報システム研究機構とかいったって全然社会的認知度が低いですからね。変に4つになったから、個々の研究所を知ってる人はいるけれど、上の組織っていったい何やってるんだって、まあ文科省からもそういうこと言われるわけで、今の文科省の幹部も1つにならないかと思って努力はしてるんですよ。やってるけれど依然として…。

高橋: まだこれから変わる可能性はあるんですか？

小平: 今はだから1つのそういう時期でしょう

ね。まあ大学の方は、90年代に始まった大学改革、大学改革30年計画のある意味じゃ行きつきそうなどころに行きつつあるんですが、その中で個々の大学は運営費交付金も少ないし、特に地方の大学は苦勞してるわけですよ。僕は90年代から言ってるんですけど、カリフォルニア大学法人っていうのがあるんですよ。それは州がバックアップしてる大学で、その中にパークレー校とかロサンゼルス校とかね、主だったものだけでも4つ5つあるのかな。それぞれがかなり独立性を持って運用してるわけですよ。そのくらいになると州知事が評議委員会に入ったりするわけで、日本ももう少し道州制に匹敵するようなどころでまとまって、1つの大学法人、連合大学法人を作って、評議会なり経営評議会に州知事とかね、その地域の財界の要人が入って実際に自分たちの地域の将来を担う人を育てるんだっていうスタンスで国立大学を運用するっていうね。それを僕は前に日経サイエンスか何かの巻頭文で書いて、そういう考え方をする人たちも出てきてるわけ。最近名古屋大学と岐阜大学が連携協定を結んだわけだけど、まあああいう動きが少し出てきて、それから地域の企業みたいなものも巻き込んで1つの連合体を作っていくっていうね、ドイツなんかじゃ割合当たり前にやられてることを日本の文科省もそれが1つの国立大学を盛り立てていく道だと、そういう大学間連携ということをずいぶん言ってるんですよ。

文科省の教育サイドではそういう1つの思想があるんですが、今の4つの大学共同利用機関法人なんてのは全然どうして4つに分かれてるのか理由もあんまりない。外国はみんなそういうのが1つになってるわけでね、「1つになったらどうです」っていう球は文科省から投げられてるんですよ。それで連合法人を作ってしかもその中に総研大も取り入れれば教育と研究一体の1つの法人ができあがるんです。けど文科省の研究助成課でそういうのを担当してる人ときどき話すんだけ

ど反応は鈍いですね。やっぱり文科省ってのは、研究者とか教育者のご意見をうかがってっていう、そういうスタンスになってるもんだから、なかなか文科省の方のリーダーシップで議論を切っていくってことはしないで、球は投げて検討してもらい。でもなかなか返りが鈍いですっていう状態なんですね。

高橋: 学術会議はそういうことには関わらないんですか？ 学術会議はすべての学術の分野が入ってるわけじゃないですか。

小平: 本当は関わるはずなだけで、いろいろな声明を出したりするけれども、日本の国立大学の在り方みたいなものの全体に対する見識のあるメッセージっていうのを僕は学術会議から聞いたことはないですね。僕らがいた頃の昔の学術会議は、結局それぞれの分野から上がってくるプロジェクトを束ねていくようなことで、あんまり実質的にその中に優先度をつけたりなんかしなかったんで、総花的になっちゃってだんだん影響力が薄くなっちゃったわけですね。それで改革されて本当はもう少し責任がはっきりするように学術会議の会員の人数を絞ったはずなのに、また連携会員とかこしらえて何千人とかになっちゃって、あれはまあ責任分散でうまくなかったように思うんですけどね。

高橋: やっぱり本来は学術会議みたいなところが、日本の研究者のボトムアップの組織として日本の学術はこうあるべき、研究機関はこうあるべきっていうのを打ち出していくべきなんじゃないんですかね？

小平: そうそう。研究者がボトムアップでこう上げてくるんだけど、やっぱり社会や国から見て、それは研究者に都合のいいように上げてくるんであって、日本の将来を担う人たちを育てる大学とか、そういう国策につながるようなものではないから。だから僕は学術会議が残念だと思うのと、あと日本学士院ってアカデミーで表彰とかなんかやってますけど、ドイツとかフランスのアカデ

ミーはもっと社会的に認知された重い役割を担って、一般の大学や研究所では推進できないような学術分野をアカデミーがやるとかね、それから一般市民のための少し高いレベルのいろんな講義を開いたりだとかね、そういう活動があるんです。日本ではそういう学術関係の大きい組織っていうか国のシステムとして上位にある組織があんまりいい方向に行っていないというのを僕は感じてますね。まあそういうのが変わるにはやっぱり1世代2世代かかるでしょうからね。そう簡単にはもちろんいかなければ、少なくとも若い人たちの中でそういうのを変えていこうっていう勢いが欲しいという気はするんですよ。それにはやっぱりもっと歴史に学び、広いところに目を向ける。それは今の若手研究者とかじゃなくて、もっと若いね、大学生とか大学にこれから進む人とか、これから自分の人生を考えるみたいな人たちが、そういう機運を持ってくれると嬉しいと思います。

●研究生活を振り返って

高橋: ではここまでたくさんお話をさせていただいたんですけど、ご自身の研究生活をあらためて振り返っていただいて、いかがでしょうか？

小平: うーん、そうですね、まあ何といっても時代がよかった。運がよかった。前も言ったように、ドイツで学位を取って帰ってくるときに、天文関係で持ってた最後の助手のポストにありついていたっていう、まあそういう時代ですよ。それから日本の経済も右肩上がりになって、それから技術的にも日本の経済の発展に伴って伸び盛りのときで、大型コンピューターもそのうち使えるようになった。ただ観測は最初は写真乾板で始まって苦労しましたが、その後ね、すばるなんかCCD時代に入ったわけで。それに世界の天文学も結構面白い時期だったわけですよ。電波天文学が発展しだして、それからスペースアストロノミーも始まってね。湯川さんがノーベル賞をも

らったり、小田先生がX線観測を始められて宇宙研ができてって時代でしたから、日本の宇宙科学、それから物理なんかは勢いづいてたところがあったと思うんですね。だから日本は国際的にも打って出るっていう時代で、まあ僕は外国へ行って学位を取って帰ってきたもんだから、そういう意味で運がよくて、まあ好きなことをいろいろやれたっていう感じですよ。

だけど高校から大学に行った頃に天文学者になりたいって言うときは、本当は数学がすごく強いとか物理がすごく強いとかそういう研究者の得意技っていうか、そういうものがちゃんとないと大変だろうなって思っていました。ただ好き、好奇心が盛んっていうだけじゃね、しょうがない。そういうことは何となく自分では感じたけど、振り返ってみると結局自分の仕事っていうのはね、empirical（経験的）な仕事が多かったように思うんです。幸運にもドイツに留学したときのウンゼルト先生がくれた学位のテーマが表向きは理論物理のテーマでしたけど、スペクトル解析をしなくちゃいけなくて、その星がpopulation IIの高速度星だったものだから、それをやった結果銀河の力学構造だとか進化だとか、それから銀河の誕生みたいなことが不思議だなと思うようになって、それが結局すばるにつながったんです。宇宙の昔の状態を見たいとか、あるいはアンドロメダの古い星団を調べるだとかそういうふうに発展したんですね。

高橋: 研究者人生をかけて取り組んだ大きなテーマですよ。

小平: だけどその間に大気球望遠鏡プロジェクトだとか、ロケットを打つとか、人工衛星の設計をやったり、それから修士のとき海野さんの指導で黒点の磁場を測ったものだからマグネティックスターにも興味があって岡山で観測をやったり、それからキャリテック（カリフォルニア工科大学）にいたときもオーウェンスバレーに初めてできた電波干渉計でそのマグネティックスターを観測し

てみたり、それで赤外線観測ができるようになったら赤外線の観測をやってみたりですね。まあだから面白いと思ったことに手を出して、ということはそれぞれのところでそんなにまとまった成果になってないんです。あるところまではいつてますけどね。だから一番成果があったのは岡村さんと始めた銀河の定量分類ですよ。あれは木曾でやったものですから、表面測光のデータをもとにした光の分布が主なデータでしたけど。それを解析したときから本当は力学的な構造データを合わせないときちんと理解できないと思ってたんですけど、この前10年ボンセンターにいた間に、ボンのポスドクの人がたまたまそういう仕事をやってたんで、その人と一緒に今までずっと共同研究して、今も論文書いてますけど、そこへつながって。だから一番大きな流れはそういう宇宙の歴史といいますかね、その中で星や銀河ができてきて、重元素が増えてきて、生命や人類につながってるってそういう宇宙誌、歴史の「史」じゃなくて、言偏に志の「誌」、そういう感じで宇宙を理解したいっていう。よく言うんですけど、人文学っていうのは人の世のあやを読む学問なんですけど、天文学っていうのは天界のあやを読む学問。僕の研究はなんかそれに近いんじゃないかって気がしますね。

高橋: 総研大の時代に生物を自分で勉強したっていう、それはやっぱりそういう流れで宇宙から生物についていうことなんですか？

小平: 宇宙からっていうかまあ生き物ってやっぱり不思議でよくできると日ごろから感心してて、時間があれば勉強したいと思ってたんです。天文学は僕が大学を卒業した1960年代から21世紀にかけてのものすごく発展したわけですけど、そのときに生物学もやっぱりものすごく発展して、DNAが見つかって二重らせんが見つかって、分子生物学になったわけですよ。そのおかげで生物の教科書なんかの様変わりして、それから脳の科学っていうのもすごく進歩したんだけど、

すばるで忙しかったりしてついていけなかった。だから時間があったら生物は知りたいと思ってたもんでね、分子生物学と生化学とそれから脳科学を勉強したわけです。それはこの世界はどうなってるんだろなっていう興味の中のひと塊っていうか、やっぱり知りたいと思ってたことだったんですね。

高橋: 最近宇宙生物学が発展してますけど、それはどうぞ覧になってますか？

小平: あれはねえ、なかなか難しいというか、宇宙の方からアプローチしてる部分と、生物学からアプローチしてる部分がなかなかまだ交わりませんよ。シンポジウムとか見ても、それぞれが関係のあることをプレゼンしてますけども、やっぱり一番わかってないのは生命の起源ですよ。最近生命分子の原始体みたいなものを実験的に作るという研究も随分進んできてますから、そのへんがわかるともう一步宇宙生物学は大きなステップを進めるかもしれません。

それともう1つはやっぱり惑星探査だよ。系外惑星の中に非常に地球に近いものがあったとして、生命があるかどうかというのの検出はね、今いろんな高性能の望遠鏡でもって議論がされますけど、なかなかまあ確証が持てるまでいくには何かもう1つ欠けてるなあっていう気はしますよね。むしろ地球外文明みたいなね、ああいうのがあればきちきちと捕まるわけで。それは可能性としては非常に小さいでしょうけど、もし捕まれば確証に近いものが得られると思うんですよね。

それで数学や物理は、宇宙っていう場を使って面白い研究がいろいろできるんですけどね、宇宙生物学の場合、天文学に切り込む道具としての生物学ってのはちょっと違いますからね。生物の場合、地球生物と全く違う種類の生物が宇宙で見つかったら、また新しい方向が開けると思いますけど、もしくは生命の起源というのが地球上で解ければね、こういう他の生命体もあるん

じゃないかっていうのもあるでしょうね。

1つ僕が面白いと思ってるのは、深海生物がありますよね。JAMSTEC（海洋研究開発機構）がやってる3,000メートルとか6,000メートルとかいくと、熱水噴出孔があってその周りに熱水エネルギーを使って硫黄とかあいう地球内部に豊富にある元素をもとにしてメタボリズムを動かしてる生命体が見つかってきてるらしいんで、そういうものは面白いなあって勉強したいと思ってて。総研大の学長の頃に、JAMSTECに深海生物をやってる専門家がいるんですけど、そういう人の話を聞かせてもらったりしましたけど、最近ちょっと不勉強になってます。元々ドイツに行ったのも好奇心の部分があって出かけたんで、だから僕は天文学者として仕事してきましたけれど、そういういろんな好奇心の、この世界はどうなってるんだろってという興味の1つの大きな塊だったっていう感じですよ。

●若い研究者へのメッセージ

高橋: じゃあですね、最後に若い研究者へのメッセージを何かいただけますか。

小平: まあ1つはなんていうのかなあ…、結局人間は自分自身のことしかわからないわけですよ。だからそういうことから言うと、好奇心を豊かに持ってってということですよ。それに素直に従って努力するんだけど、部屋の中で閉じこもって好奇心だけ持っててもどうしようもないわけで、やっぱりいろんな人と話して付き合えと。部屋の中でこもってるにしても、本をたくさん読んで歴史を学ぶとか。それから僕はよく言うんだけど、情報っていうのは「情」っていう字と「報」っていう字を書く。報の方は今インターネットがあれば家の中にいたってたくさん取れるわけですよ。だけど「情」が伴ってない情報ってのはやっぱり砂上の楼閣みたいなものでね、本当のところはわからない。だから学会で話を聞くだけではだめで、人と付き合う。それからいい

論文があればそのオーサーに会うとかね。僕はそういうのを広い意味で「旅」って呼んで、それは旅行っていうことではなくて、自分の持ち合わせてる領域から外に出て、いろんな人と触れる、いろんな環境に身を置かっていうそういう好奇心の満たし方ができるといいなと思いますよね。「若い人」って一般的に言っちゃあいけないでしょうけど、職場なり研究室なりいろんなことで閉塞的になっていたら自分から破って出る努力はしないとけない。

何となくここ10年ドイツで若い研究者の交流を手掛けてきたり、総研大で学長をやって学生さんに触れてきたりした感じからすると、僕らのころは日本が戦争に負けて、本当にこう押し込められてたのが溢れ出した時代だったから、そういう空気があったんだと思うんです。今、一応安定しちゃって、それゆえになかなかそこから抜け出さない、安住しちゃうような面もあるんでしょう。でも若い人はやっぱりこれから育っていくわけだから、旺盛な好奇心を持ってそれを広げるように旅をするっていうか、自分を新しい人に触れさせて新しい環境に置く、それはしてほしいと思いますよね。

それからやっぱり人間ってみんな違うわけで、そういう多様性を認めるというか尊重するというかね。今みたいに何でもかんでもランキングして一律に並べて偏差値がどうのっていうのじゃなくて、やっぱりそれぞれの個性を大事にする。個性っていうのは長所が同時に短所でもあり、短所がある側面では長所にもなるわけで、学問的にもやっぱりいろんな立場を認めてお互いに理解していく。コミュニケーションというか、人と人の関係っていうのは学問をやるうえでもなんでも社会で大切なわけで、多様性を認めてお互いに理解して、それで信頼関係を築いていかないといけないんだろう。

そのうえでやっぱり若い人は何か志を持つ。それはいろんなレベルがあると思うんですよね。新

幹線の運転手になりたいって思う人もいるし、政治家になりたいと思う人もいるかもしれないけど、僕は若い人が何かそういう志を持つならやっぱりみんなに喜んでもらえること、私腹を肥やすっていうんじゃないで、それが実れば何かみんなの役に立つようなことを考えてほしいというのが一般的な僕の枠組みです。

天文学をやりたいって若い人がいた場合に何か僕が言えるか。それをやりたいならあの先生のところに行きなさいとか、こういう研究スタイルでやったらいいとかね、僕は自分の人生から見て特に人にこうしなさいってことは言えないですよ。僕は自分の好奇心で進んだ。それしかわからないから。でも確かに人の運っていうのがあってね、僕はウンゼルトさんに会ったりしたのは、どちらかという運がよかったと思うんですよ。ただやっぱり幸運というのはじっとしてたんじゃなかなか巡ってこないわけで、外に出ていくっていうかね、それが大切なような気がします。

自分としてはもっと理論がきちっとできる研究者であったらば、もっと楽しかったんじゃないかと思えますけどね。ときどき試みはしたんだけど、やっぱり駄目ですね、能力がないっていうかね。だからまあ人それぞれの能力と適性みたいなものがあるわけですからね。それを抑え込んでほかのことを無理するよりはやっぱり自分の好きなこと、興味のあること、できることを伸ばすっていうのがこの社会で結局はみんなにも喜ばれて重宝される道だと思うんですよ。

後はやっぱり大学の先生なんかはもっとしっかりしないといけないというか(笑)。

高橋: はい、若手じゃなくてそちらへのメッセージでもいいですよ(笑)。

小平: なかなか言いにくいんだけどね。ともかく日本の大学の先生全体にね、我々の将来を担っていく若い人たちを育ててるんだっていう気概がないと、ただ自分の研究を進めるとかそういう気持ちだ

けではやっぱりお金は回ってこない。そういうと突き放したようで申し訳ないけれどね。社会の方でもやっぱりなにか大学の先生にお金やってもいいけど、それでノーベル賞を取れるのかとかね、そういう話になっちゃうんで。自分たちの未来を担う人たちが大学というところで育てるんだっていう意識がないと。もちろん研究も必要ですから、研究室っていうのがあってもいいけれども、なんか…、天文月報に出るような若い人へメッセージって言われてもなかなか僕には難しいなあ。

高橋: すばるを推進する、国立天文台長を引き受けるっていうのも日本全体のためっていう意識が強かったですか？

小平: いやだからそこに行きつくまでにはすごく悩んだわけですよ。僕はずぼらな性格だし、古在(由秀)さんや海部(宣男)さんみたいにリーダー志向ではないですから。すばるの方を取ったら自分の学問はしばらく横に置かなくちゃいけない、それで本当にお金がかどうかもわからないわけね。そのリスクにかけるかどうかっていうのはやっぱりずいぶん悩みましたよね。本当にもう自分でもなかなか決心がつかなかったし、外国調査でどんどん家計を圧迫するしね、大変でした。

高橋: そうですか。結果的にすばるはちゃんと完成して、ちゃんと活躍をして、人がたくさん育てるわけですよ。

小平: まあね、それも運がよかったと思うんですよ。まあ本当にやっぱりすばる計画っていうのはみんなに喜んでもらえるプロジェクトで、自分の研究のためっていうだけじゃなかったからね。まあお金もつき、最後は財務省の人だとか文科省の人も「よかったですね」って言ってくれるようなね。それから天文が嫌いな人っていないんですよ、不思議なことに。みんなね、心の中に宇宙に対する興味というのは持っているわけで、その心の中の引き出しを引っ張り出して、みんなでやろうよっていうふうな雰囲気になれたんです。

高橋: すばる以降、ALMA, TMTと今後ますます大規模な計画が動いていきますよね。

小平: だからね、僕が今の若い人に言いたいことは、飯を食うためにビッグプロジェクトのポストに入って、それは研究者としての処遇を得るためにやってるわけですね。それが自分の好奇心に基づいた自分の学問と一致してれば非常にハッピーですけど、ビッグプロジェクトだから途中から入ると途中からしかその学問に加われないわけですよね。今はそういうプロジェクトポストっていうのは結構ありますね。ドイツでも日本でもそうですけれど、学問自体がビッグになってきますからね。データもビッグデータだし、それはやむを得ない面があるんだけど、それをやりながらやっぱり自分の学問というのを育てていって、やがてはそこから新しい芽を出していける元手をきちんと自分で持っていることと、あるいはそういう仲間を作っていくっていうのをしてほしいと思うんですよね。それはうまくいくばかりじゃなくて、僕が40代で悩んだようにね、非常に悩むことも多いと思うんですけど、やっぱり人生なんて一生勉強ですから、いつ悩んじゃ困るっていうことはないんでね。悩むことに怖気づかずに自分の学問を育てていける勇気を持ってほしいですね、若い人にはね。僕らの時代と違って今、本当にビッグプロジェクトになってきちゃってるからね。それだけにね、そのプロジェクトを担う大学共同利用機関っていうものがね、もっとしっかり学術の基本を担うっていうスタンスを持った集団であってほしいって思うんです。

高橋: 何かプロジェクトにいと、特に国立天文台の方々は日本全体にサービスをしなきゃいけないってことなわけですよ。するとなかなか自分の学問をするというのは難しいかもしれませんね。

小平: それはまあ台長さんの性格にもよるでしょうけどね。つまりプロジェクトはプロジェクトとして仕事としてやらなくちゃいけないけれども、

その中である新しい分野に興味を持ってる人たちがワーキンググループを作るとかね。そういうことを奨励しようっていうトップと、そういうものはしないでプロジェクトをきちんとやれっていうトップとまた違うと思うんですね。僕はまあプロジェクト一色にならないで、同好の士が集まって議論していけるような場っていうか雰囲気が若い人の中にあるといいと思いますね。それから大きいプロジェクトになると、専門的なことを担うから一人がやることは全体の一部だけになるわけですね。それも気の毒ですよ。だから一部を担うんだけど、関連のほかのことも身につけていけるような、若い人を育てる教育的側面がプロジェクトの中にうまく組み込めればいいと思いますね。

高橋: どうもありがとうございました。

●おわりに

小平さんへのインタビューは2018年から2020年にかけて8回にわたって行われました。1回3~4時間に及ぶ長いインタビューに付き合ってくださった小平さん、ご自宅でおもてなしをしてくださったウタさんに感謝いたします。また、原

稿作成に協力していただいたり写真を提供していただいたりした方々にも感謝いたします。

謝辞: 本活動は天文学振興財団からの助成を受けています。

A Long Interview with Prof. Keiichi Kodaira [12]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the final article of the series of a long interview with Prof. Keiichi Kodaira. After serving as the president of the Graduate University for Advanced Studies, Prof. Kodaira served as the director of Bonn Center of the Japan Society for the Promotion of Science, where he devoted himself to academic exchange between Japan and Germany. After working in Bonn for 10 years, he realized that the roles of universities and their relationship with society are different between Japan and Germany. Prof. Kodaira is also deeply involved in academic administration. Prof. Kodaira talks about the ideal way of university, academics, and education, and finally, he gives a message to the readers.